

「庭」をめぐる

石堂 藍

文献に「庭」らしいものが出現するのは、エジプトでは「ハトシェプスト女王がデル・エル・バハリの神殿に庭を造るよう（神に）命じられた」という王家の谷の碑銘が最初らしい。庭の規模などの詳細はよくわからない。紀元前1500年頃のことである。

エジプトの高官ネバムンの墓の壁画に描かれた庭園（下図）も知られているが、これもほぼ同時期のものである。蓮の花が咲き、鳥たちが憩う池の周りに立ち並ぶ樹木。庭は、特筆すべき豊かさの象徴であり、あたかも死後の楽園のようだ。

文献的資料に先立ってこのような庭らしい庭が出現していたのは間違いないと思われるが、果たしてそれがいつからかということについて確かなことは何も言えない。古代文明の頃の庭の遺構などというものは存在しないからである。

― 庭とは何か

庭――美しい植栽と花壇、そぞろ歩く小道、池、噴水や水の小流れ、四阿、彫像や灯籠が置かれ、垣根に囲まれた小世界。



あるいは家に付随する、いろいろな用途に使える空き地。現代で「庭」と言って浮かぶのはこのようなイメージだろうか。

しかし古代の日本で「には」と言えば、このような場所を指すのではなかった。語源的なところを少し見ていこう。

古代日本では、「には」と言えば平かな場所で、事を行うところであった*。従って、平かな海もまた「には」であった。事というのは、神事であったり農事であったり漁事であったりした。農家の前庭が作業場であることに、その名残が見て取れる。古くはここで神事を行ったりもしたのである。

漢字の「庭」は宮城の中庭の屋根がある部分を意味する。「廷」が屋根のない部分。日本では古くからの「には」の意味に漢字の「庭」の意味が結びつき、今の「庭」の意味へとなっていく。平安時代からは今のような意味になったらしい。

左ページの図は後白河法皇の命によって作られた『年中行事絵巻』（1150年頃）である。宮城の中庭で、さまざまな行事が行われるさまを描いた絵巻である。「には」の原義と「庭」とがみごとに結びついている。上段は「朝覲行幸」。公家が新年のご挨拶に伺候したところで、神楽などが催されている。次が「蹴鞠」。庭はスポーツをする場所でもあった。これは世界（庭を持つ文化の場合）共通のようである。次が「御斎会」。最も大事な行事であったというが、要するに神事（仏事）である。

* ちなみに「エデン」はシュメール・アッカド語で「平らな土地」のことだという。

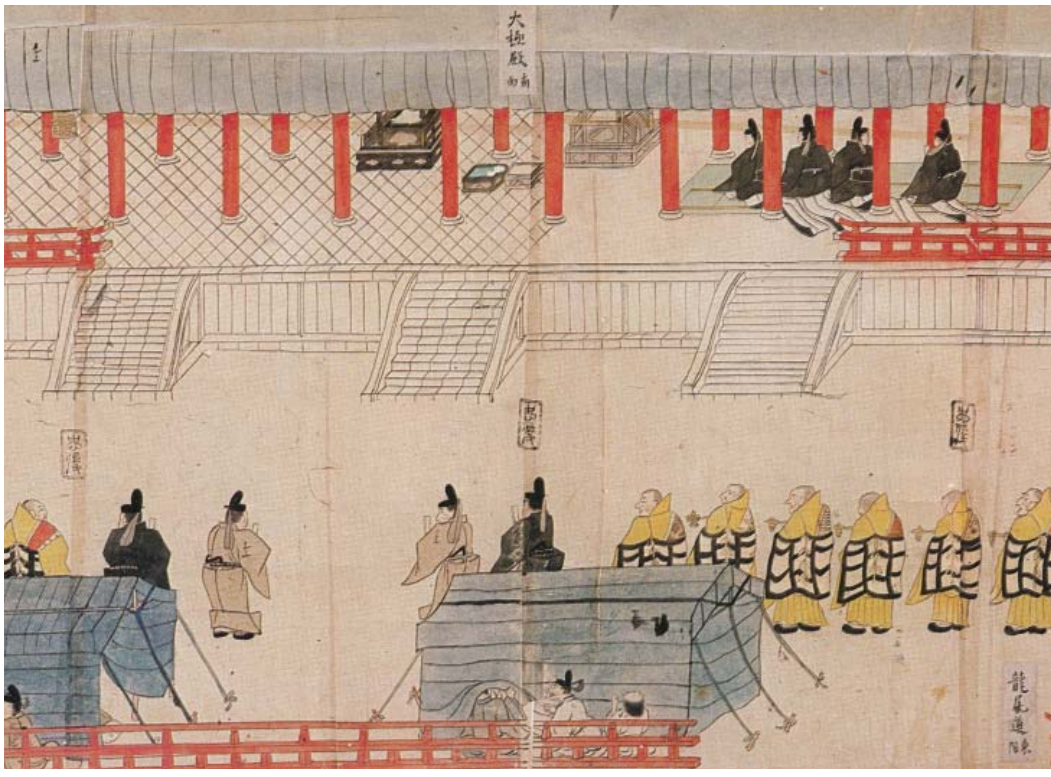


では、平安時代以前の古代には、現代の意味での庭は何と呼ばれていたかという点、「しま」とか「その」と呼ばれていたのである。庭には池があつて島があるので、そこから庭が「しま」となったという説もある。池の中に島があるのは中国の神仙思想の明らかな影響であつて、島は蓬莱山である。その形式が珍しかったので、意味深く整えられた庭らしい庭を「しま」と呼んだのだと。

「その」の方は、「園」「苑」の漢字が当てられ、意味的にも中国と近かつたのではないかと思われる。つまり、果樹園や花園から「庭」的な意味を持つようになったのだらうと推測される。中国を見てみると、「園」は果樹園、「苑」は禽獣を飼うところ、「圃」が菜園である。「圃」はこれに加うるに垣根があるということ。中国では従って「園圃」というのが庭を包括的に言う言葉となる。しかし一般的に「園」か「圃」が使われていると思う。

英語では garden, yard, court が「園」「庭」といった意味になるが、ラテン語の「hortus gardinus」（囲われた庭）に由来する語だが、「gardinus」はゲルマン語からの「囲われた」を借りてきたものだというが、それはもともとラテン語の「hortus」由来の言葉であるらしい。ラテン語の「庭」（この語源ははっきりしないが、ギリシャ語の草地から派生しているという説がある）から「囲われた土地」が派生し、その「囲われた土地」が「庭」となったということのようである。

エデンの園の「園」はヘブライ語で gan というが、これもま



た「囲われた土地」を意味する。

paradise というのは七十人訳聖書における「園」を通じて取り入れられた言葉で、もとはペルシア語 *paridaeza* (圃う)。ペルシア語の原義も「園」はやはり「囲われた土地」なのである。語源的な側面から考えるてみると、庭の第一の要件は、「囲われた土地」だと言えるのではないか。

庭は囲われた土地だと考えると、その原型として、いくつかのものが考えられる。

森の中の空き地、森の中の泉とその周辺、山の中の開けた場所、砂漠におけるオアシスなどである。「圃」や「園」などの農耕以前にこのようなものからインスパイアされて、庭のイメージが誕生したかもしれない。

一方、このような開けた場所は祭祀とも関わりがある。広場で祭祀が行われるのは、驚くようなことではない。とすると、日本語の「には」とも意味は通じてくる。

作庭家で日本庭園の研究者でもある重森三玲^{しげもりみ}は、磐座^{いむくら}のようなものが日本の庭の原型ではないかと言っている。磐座は神の座、すなわち神の降りるところであるから、意味的には確かに神事が行われる「庭」と通じてくる。

また、ある程度の高山には、「お庭」「お花畑」と呼ばれる場所がある。江山正美は日本の庭の原イメージはこの「お庭」で

* 『日本庭園史大系 1 上古・日本庭園源流』(1973/社会思想社)



三輪山山頂の奥津磐座

はないかと言っている。^{**} 左ページ下の図は北岳の山頂近くにある高山植物のお花畑である。3000メートルという高い位置にある。このような山中に不意に開ける花園は、山の隠れ里や桃源郷のイメージともつながっていくように思われる。

しかし日本のさまざまな文化に対して、中国からの影響は圧倒的であり、日本的な「原庭^{げんてい}」があつたとしても、中国由来の思想——まずは神仙思想、次に浄土思想によって塗りつぶされていく。日本では神社に附属する庭が古式を留めているのではないかと言われているが、それはおおむね神仙思想がうかがえるものようだ。また平安時代の寝殿造りに付随する庭は浄土教の極楽を模したものだと言われている(具体的には『往生要集』の極楽の描写)。

話を本筋に戻すと、庭は「囲われた土地」であるから、守られているところであると同時に、隠されている(他者を閉め出す)場所でもある。だが、完全に閉じられた空間でもない。「建物の中」とは違うのである。たとえばそれが建物に囲まれた中庭であつても空に通じているし、温室のように空も閉ざされていても、大地には繋がっている。その事実から、庭にさまざまな象徴が付けられていく。

^{**} 『庭の文化史 日本のにわ考』(1978/文一総合出版)

^{***} 庭が重要な役割を果たす日本昔話に、「鶯の座敷」「四季の座敷」と呼ばれる話がある。山中にあらうはずもない立派な一軒家の座敷から四季の庭が見えるというもので、「見るなの禁忌」を伴う。



北岳・山頂からやや下った斜面に広がるお花畑

2 古代文学のなかの庭

【シヤマシユの庭？】

『ギルガメシュ叙事詩』（紀元前1800年頃）には、不死者の住んでいる場所はあるが、「園」「庭」という言葉は出てこない。しかし一つだけ気になる描写がある。それは不死を求めてさまようギルガメシュが、暗い山の中（洞窟のイメージ）を抜けて行くと、ついにシヤマシユの前に出た、という部分である。ここでは茨が「紅玉髓の実を付け、葡萄の房をたわわにし、眺めるに美しかった。それらはラピス・ラズリの葉をつけ、実をつけ、見るも楽しかった。」（月本昭男訳）。思い浮かぶのは、宝石を生らせる樹の植えられた、この世を越える神の庭のイメージだ。しかし、これが庭のようなものを念頭に置いて書かれているのかどうかはわからない。この部分が「文学に現れた庭」の最初だという説も特にないようなので、ただ、このようなイメージが、後に神の庭のイメージに影響を与えた可能性はあるのではないだろうか。植物と鉱物をめぐる幻想としても注目に値する。

【エデンの園】

『創世記』第二章（J資料）の「エデンの園」は、文学に描

* 成立年代は紀元前9～10世紀。しかし実はバビロン捕囚の頃（紀元前6世紀）かも？という意見もある



かれた具体的な庭としてはかなり古い方に属する。その庭はこのようなものである。「2…9主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と、善悪の知識の木を生えいさせられた。2…10エデンから一つの川が流れ出ていた。園を潤し、そこから分かれて、四つの川となっていた。（中略）2…15主なる神は人を連れて来てエデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。（中略）2…19主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれをどう呼ぶかを見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。」（新共同訳）この記述には、花が咲き乱れ鳥が歌い……という、後の楽園では当たり前になるものは、いまだ見受けられない。しかしエデンでは、すべての獣が平和裡に暮らしているようであり、争いのない黄金時代を思わせる。また果樹園のイメージが強いが、しかしそこでも人は耕して働くことを期待されている。神は労働力として人を作ったというエジプト神話を思い出させる。まもなく、禁忌を犯した人間は、この園から追い出され、茨の道を歩むことになる。天使が彼らのエデンへの侵入を阻むため、そこに戻ることはできない。やがて人間はその場所がどこかも分からなくなってしまう……。喜ばしい場所、人を守護する場所、そして人を閉め出すところ、聖域、隠された秘密の場所といった、庭の基本的な機能が神話として象徴化されている。

▲クラナッハ『楽園』（1530）

楽園からの追放までが同一画面に描かれているが、中心になっているのは、あらゆる獣が平和裡に生きる、黄金時代風のエデンである。

◀ボス『地上の楽園／楽園への上昇』（15世紀末）

「エデン」はあくまで地上の楽園であって、天国ではない。山の上に噴水があり、円形の水盤から方形の水盤へと流れ込んでいるのに注目。噴水は宇宙樹の象徴であると言われる。また、円は完全を示し、神の世界を、方形はやがて縁になるべき地上世界を示すという。

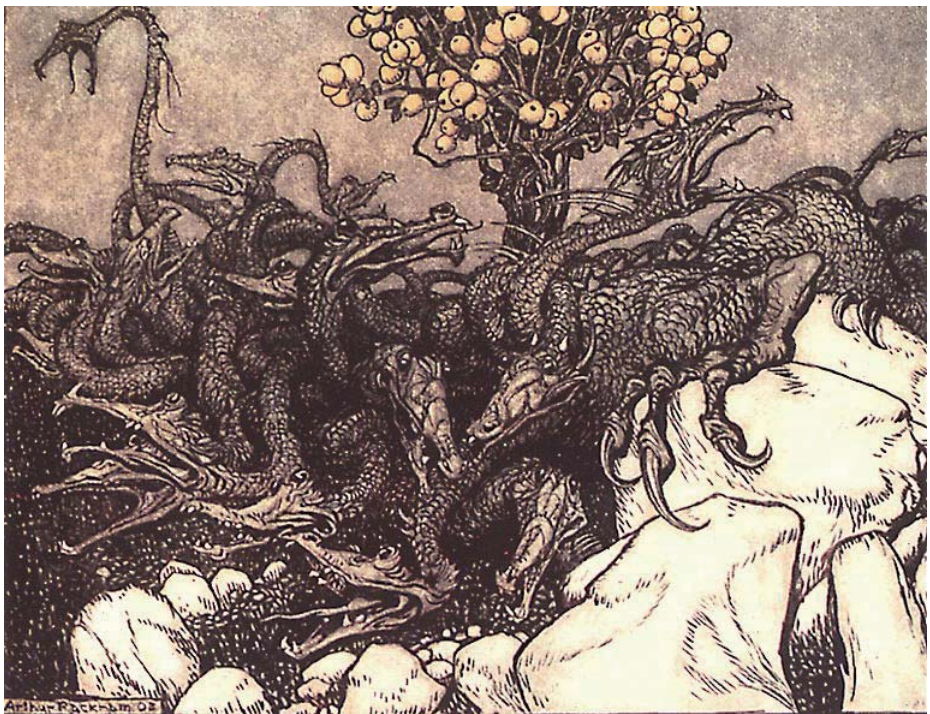


【ヘスペリデスの園】

ギリシャ神話に登場する庭。不死、あるいは不眠の竜ラドン（竜はテュポーンの子で、百頭という伝承もある）と三人のヘスペリデス（夜の女神の娘たち）に守られている黄金のリンゴ（不老不死のリンゴ）の木がある。西風が吹く、常春の地であり、その点では海上他界の「エリュシオンの野」を思わせる。ヘラクレスの十二偉業のうちの一つが、この園からリンゴを取ってくることであった。やはりこの庭も、喜ばしい場所であり、リンゴを守る場所であり、人を閉め出す禁忌の場所だ。庭につきまとう三つの大きな機能が現れている。そして、守られている聖域だからこそ、そこに「侵入する」というモチーフが生まれる。守られている庭を侵す、という一つのドラマがここに現れる。

【アルキノオス王の庭】

『オデュッセイア』（紀元前8世紀頃）第七書に登場する庭である。漂流していたオデュッセウスが打ち上げられる島の王がアルキノオスであり、『オデュッセイア』の主要部分は、王たちに冒険の仔細を語るといふ形を取っている。オデュッセウスが骨休めをする島の王庭は以下のようである。「中庭の外にはまた、門の扉に接近して、四畝ほどもある広々とした果樹園がつづき、両側からぐるりと囲いの垣根をめくらす、そこには野梨やざくろ、また輝くほどな実を結ぶ林檎の木、あるいは甘い無花果の木や、繁り栄えるオリブ樹など、いろいろな果樹が丈高く、み



な勢いよく生い繁っていた。そうした木々の実は、けして腐らず、冬といい、また夏といい、年がら年じゅう絶えることがなく、それはもうしよつちゅう優しい西の風が吹き寄せ、木の実をあるは実のらせ、あるは熟させてゆくもので、梨の実は梨の実の上、林檎は林檎の上に古びてゆき、他方ではぶどうの一房がまた房の上に、無花果は無花果の上に月を重ねた。（中略）きれいに列んだ野菜畑で、あらゆる種類の蔬菜が植えつけられていて、一年中を賑わい立たせる、その間を二筋の泉が流れてゆく」（呉茂一訳）この庭はひたすら豊かさの象徴である。一定の気候に豊富な作物。これだけで、古代の人々には楽園であったのだ。そしてこの王庭は、王の権力と威光の象徴でもある。これほどの庭を持ち、豊かさを享受できるだけの権力が王にはある（古代ギリシャ的には、神から与えられている）。同時に、この泉の流れは庶民が利用できるというふうに、王の恩恵が庭の外の一般民にも及ぶことが語られる。庭がアルキノオス王が理想の王であることを象徴するのである。

【周の文王の霊園】

『詩経』（紀元前7世紀頃）に現れる庭である。

「王霊園に在り、ゆう鹿 攸に伏す。

ゆう鹿 濯濯たり、白鳥 嚮嚮たり。

王霊沼に在り、於 みて魚躍る。」

文王は民に慕われたので、民が力をあわせて霊台（天文台）

▲アーサー・ラッカムの絵はリンゴを守る百頭の竜を描いたもの。常春の楽園という感じがまったくしない。▲バーン・ジョーンズ「ヘスペリデス」（1869）は、「エデンの園」に描かれる蛇にそっくりだが、「ヘスペリデスの園」の構図は実は五世紀の壺絵でもこれとさして変わらない。むしろこうした図像の意匠がキリスト教絵画で使われたと見るべきではないだろうか。



を造った。そしてその苑では動物たちも憩う。王の湖では魚も躍る。これもまた王の威光を庭が象徴している。アルキノオス王の庭と同じである。しかし動物や魚たちがそれを示すところが違う。動物までもがなびくほどの王の威光なのである。そこには神に選ばれた王としての、超自然的な力が、ギリシャよりも強くみなぎっているように思われる。別の角度から見れば、草食と肉食ということにもなるが、ギリシャよりも中国の方が観念的だとも言える。

なお、中国の皇帝の庭は帝園と呼ばれるが、途方もない広さを持っている。百里四方（中国古代の1里はおよそ0.4キロ、単純計算で1600平方キロメートル、大阪府ぐらいの大きさ）の園を持つことができた。そこには、あらゆるものがあり、軍事演習までもが行われたという。また、皇帝の弟などの王は五十里四方の王園を所有できた。漢の上林苑（紀元前142）は、周囲三百里（123キロ）だったという。まったくイメージでしかない大きさである。

【閉ざされた庭】

旧約聖書『雅歌』（紀元前4世紀頃）は愛と結婚を歌う相聞歌だが、その第4節では庭が隠喩として用いられている。庭はそこまで一般的になったのである。「若者の歌」わたしの妹、花

* 金子裕之編『古代庭園の思想』（2002／角川選書）より多田伊織「ニワと王権」



上部ライン地方の画家による「閉ざされた庭 (hortus conclusus)」マリアは読書、幼児のキリストは聖セシリーエの楽器と戯れる。

嫁は、閉ざされた園。／閉ざされた園、封じられた泉。／ほとりには、みごとに実を結ぶぎくろの森／ナルドやコフェルの花房／ナルドやサフラン、菖蒲やシナモン／乳香の木、ミルラやアロエ／さまざまな木、すばらしい香り草。／園の泉は命の水を汲むところ／レバノンの山から流れて来る水を。／／「おとめの歌」北風よ、目覚めよ。南風よ、吹け。わたしの園を吹き抜けて／香りをまいておくれ。恋しい人がこの園をわがものとして／このみごとに実を食べてくださるように。」（新共同訳）

ここでは庭はエロスそのものの比喩となっている。「閉ざされた庭」は処女性、あるいはまだ自分のものにはなっていない女性の肉体を象徴する。豊かな薫り高い庭は、女性の肉体（性器）の比喩。乙女もそれに応えてフェロモンを振りまいて、恋人を誘うのである。このあけすけと言ってもいいほどのエロティックな詩が、どういう経緯でか、ユダヤ教、ひいてはキリスト教の正典とされたために、この詩は直接的な比喩を越えて、神聖なものの暗喩として読まれることになった。すなわち、閉ざされた庭とは、聖処女、聖母マリアだとされたのである。そして入口が狭い庭は、エロティックな意味を排除された子宮になぞらえられ、庭は胎内のイメージも持つに至った。

【ルンビニの花園】

シッダールタ（ブッダ）は樹木・庭園と関わりの深い宗教家である。樹下に産まれ、樹下で悟りを開き、樹下に入滅する。

ルンビニはブッダの産まれたネパールの村の名前。マヤー夫人はお産のために里帰りする途中、ルンビニ村の花園で休憩する。そこで無憂樹（アショーカ）の花を手折ろうとして夫人が手が伸ばした途端に、ブッダが生まれたという。ここで園は、出産という非常にプライヴェートなことでブッダという普遍的なものとが交錯する場所となる。閉じているけれど、開かれていくという、境界領域としての庭の役割が透けて見える。



ネパールの細密画。ルンビニの花園で脇の下からブッダを産むマヤー夫人とその一行。

【「コリユクスの老人の庭」】

ウェルギリウスの『農耕詩』（紀元前30年頃）。牧畜にも葡萄栽培にも適さないさやかな土地に、さまざまな種類の野菜と花、樹木を植え、蜜蜂を飼い、豊かに暮らしている、と歌われる。自給自足の理想の生活の原イメージを表現する詩だ。この庭では、アルキノオス王の庭には見られなかった花々が美しさを競っている。ローマでは紀元前より造園技術も発達して、さまざまな華麗な庭が存在しようだが、いわば特権階級の持ち物であったそうした庭とは対照的な、庶民の、自然に寄り添った庭。とはいえ、このようなイメージもまた、ローマのヴィラには取り込まれていたのだろうが。

ともかくも、紀元前後ともなれば、文学に現れる庭も、現代の庭のイメージと変わらなくなると言ってもよいだろう。

【ゲッセマネの園】

「新約聖書」のうち「マルコの福音書」に「ゲッセマネ」という言葉が表れる。イエス・キリストが最後の晩餐の後、弟子たちから少し離れて一人で神に祈りを捧げた場所。「この杯をわたしから取りのけてください。」と祈ったのである。「ルカの福音書」では「オリブ山のいつもの場所」となっている。「ゲッセマネ」と「オリブ山」は実は同じものかも知れないが、一般的には「オリブ山にあるゲッセマネの園」とされている。もちろん聖書には「園」という言葉は出てこない。イメージとしては、オリブ

5 幻想文学における庭の展開

【権力・威光を示す庭】

文学の中でも華麗な庭の描写は、しばしば権力や威光を強く示す。日本文学の中では、なんといっても紫式部の『源氏物語』『蝴蝶』（10世紀末）冒頭に描かれる。六条院（光源氏の住まい）での庭遊びのさまが、光源氏の威光を示すものとして印象深い。

三月の二十日過ぎ、六条院の春の御殿の庭は平生にもまして多くの花が咲き、多くさえずる小鳥が来て、春はここにばかり好意を見せていると思われるほどの自然の美に満たされていた。築山の木立ち、池の中島のほとり、広く青み渡った苔の色などを、ただ遠く見ていただけでは飽き足らぬものがあるうと思われる若い女房たちのために、源氏は、前から造らせてあった唐風の船へ急に装飾などをさせて池へ浮かべることにした。……あちらにもこちらにも霞と同化したような花の木の梢が錦を引き渡していて、御殿のほうにははるばると見渡され、そちらの岸には枝をたれて柳が立ち、ことに派手に咲いた花の木が並んでいた。よそでは盛りの少し過ぎた桜もこぼかりは真盛りの美しさがあった。廊を廻った藤も船が近づくにしたがって鮮明な紫になっていく。池に影を映した山吹もまた盛りに咲き乱れているのである。水鳥の雌雄の組みが幾つも遊んでいて、あるものは細い枝などをくわえて低く飛び交ったりしていた。鴛鴦が波の綾の目に紋を描いている。写

ブの林（オリブ果樹園）である。ともかくも、ここでイエスは一人祈る。園は、ここでは一人になるためのプライヴェートな場所、祈りの場、瞑想の場となっている。日本語の古い「には」のイメージとも響き合ってくるが、キリスト教では、こうしたことから、庭は内面の象徴、魂の比喩ともされてゆくのである。

3 庭が象徴するもの

ここで、庭のイメージについてまとめておこう。

○秩序（人の手によって囲われた場所は、自然の暴威から守られ、秩序だった姿を示す）

○自然（自然全体とは境界を持ちながらも、大地・空とつながり、そこに息づいているのは紛れもない自然である）

○力（権力・財力なくして庭は造ることができない。庭のすばらしさは、権力者の力や威光を示す。そしてまた自然を制御する人間の技術力をも示す。「バビロンの空中庭園」はその典型的な例である）

○キリスト教における聖母・処女・子宮（特に閉ざされた庭の場合。）

○魂・内面的なもの（瞑想の場所、探究の場所、秘密の場所というイメージ）

庭は、自然と秩序が同居する理想の場所であり、飲む場所である。そこでは心身が癒やされ、平和が生まれる。



土佐光吉筆 源氏物語図屏風

生しておきたい気をする風景ばかりが次々に目の前へ現われてくるのであったから、仙人の遊戯を見ているうちに斧の木の柄が朽ちた話と同じような恍惚状態になって女房たちは長い時間水上にいた。(与謝野晶子訳)

他所では桜の盛りは過ぎていくのに、ここでは自然も光源氏に靡き、花の四季をずらしているのである。神仙思想も援用して庭を讃えるのは、いかにも教養深い紫式部である。ここまで華麗な庭の描写は、日本の古典文学では類例をみないと言えるだろう。

【愛の庭】

『万葉集』（8世紀頃）では園は果樹園であることが多く、梅の園や李の園が登場する。「梅の花咲き散る苑に吾行かむ君が使を片待ちがてり」（片待つはひたすらに待つ）このように愛・恋人と結びつくことも多い。

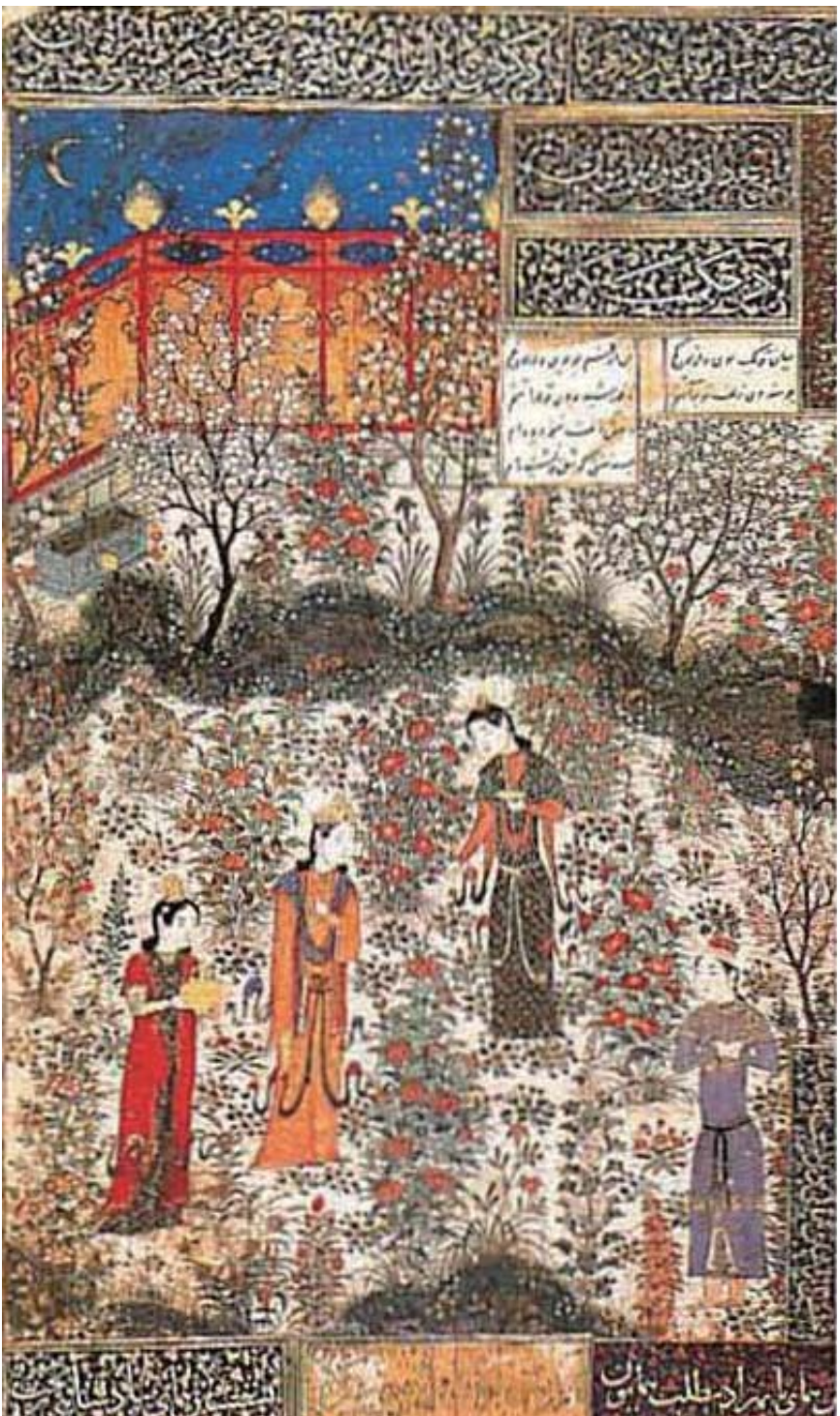
愛の庭というイメージは、おそらく世界中にあるのだろうと思われるが、文学における「庭で愛を語らう」シーンで、「庭」に重きが置かれることはほぼない。数少ない例外が、ギョーム・ド・ロリスの韻文『薔薇物語』（13世紀初め）である。『薔薇物語』の庭は「閉ざされた庭」だが、内部は世俗的な悦楽に満ちており、『雅歌』の元来の意味を継ぐ内容となっている。すなわち主人公の男は、庭の奥に隠されている薔薇に恋して、それを手折

ろうとするのだ。いわゆる寓話になっていて、擬人化された種々の観念が庭の中には存在する。だが、庭そのものの描写は具体性に満ちており、まさに地上の楽園である。

庭園全体に歌を囀り交わす小鳥たちがあふれていた。(略) 天上の天使たちのような歌を奏でていたのだ。その歌を耳にして、わたしが譬えようない飲びを覚えたことをわかっていただきたい。かくも甘美なメロディーは、およそ死すべき人間の耳にするところではないのである。とても優しく美しい歌だったので、小鳥たちの囀りとは思えないほどであり、海にいたセイレーンたちの歌にも比較できるくらいだった。

庭園は正確に完璧な正方形を成していて、縦も横も同じ長さだった。およそ実のなる木であれば、見てくれの悪いものを別にすると、庭園に三本、二本、あるいはおそろくそれ以上の数が必ず植わっていたことだろう。よく覚えていたのだが、柘榴の木があった。この実は病人によいとされている。胡桃類の木はふんだんにあって、季節になるとにくずくの実のなる木もあった。……またここには香料の木も数々あって、丁字のつばみや甘草、新鮮なカルダモン、がじゅつ、アニス、シナモンなどともに、その他多くの食後に食べるとおいしいスパイス類があった。

(略) そこが夏も冬も区別なく、絶えずふんだんに花が咲き乱れているような場所だったからだ。とても美しい葦が、爽やかにみずみずしく花を開かせている。また、白や真紅や黄色の花々が驚くほどたくさん咲いていた。大地はこの上なく美しい。さまざま



庭園のフマリーとフマユーン

色で飾られ、彩られていたからだし、またその香りがとても素晴らしかったからだ。(篠田勝英訳)

「見るに良い木」はエデンの園を引き継いだ言葉だが、そのほかの体に良い木、スパイスの類への言及は直接的には聖書に拠らないもの。とはいえ、聖書解釈の中には、健康を約束するような植物が存在していたにちがいないという類推もあっただろう。中世には修道院がその中庭で薬草を育てていたことと響き合い、庭の「癒やし」という側面を強調する。また、小鳥のさえずりなどは神話には見られなかった庭の属性である(文学的な初出は未調査だが、ローマ時代の庭に関するエッセーがそうか)。花の美しさばかりでなく、香りの素晴らしさも強調されている。庭の遊びは、エデンの園やアルキノオス王の庭の頃は食欲を満たしてくれるということ(飢えの恐怖からの解放、敢えて五官で言えば舌の遊び)だけだったのに、今やその遊びは五官すべてに訴えかけるものとなったのである。

『薔薇物語』は、先行作がはつきりとせず、部分をさまざまなものに負っているだろうとは思われるが、完成された形は独特のものであって、後世にも強い影響を及ぼした。「庭」をモチーフとしたファンタスティックな物語としては、中世最大の作品であり、類似作のなさから見ても、非常に貴重である。別人の手による後半はともかく、前半部は最大の讃辞を捧げられしかるべき作品だろう。

ギヨームの『薔薇物語』を英語に訳したチョーサーの『カンタベリー物語』『貿易商人の話』(14世紀末)にも庭が描かれる。老人が若く美しい妻をめぐったため、異様に嫉妬深くなり、妻の方は夫にうんざりして浮気を始めるという、例によって下品な話だが、おもしろいのは、ベッドでは役に立たない老人が、庭園だものになるところ。庭では自然(野性?)に返るということ、もしくは庭の癒やしの効果が語られていると言えよう。老人は庭に鍵をかけているが、妻は合鍵を作って愛人と庭でむつみ合う。鍵をかけているので安全な場所だと夫は思っているが、妻はその裏をかいている。チョーサーは、「閉ざされた庭」のパロディを書き、「聖母・処女」という庭の象徴を逆転させたのだ。同時に、「ヘスペリデスの園」のところでも述べた、守られている、安全であるべき庭への侵入という古典的なモチーフが使われているとも読める。チョーサーは庭の伝統を生かしつつも新しいところへ踏み込み、庭の両義性をあらわにしている。

ファンタジーにおける「愛の園」に関しては、エドモンド・スペンサー『妖精の女王』(16世紀末)に現れる二つの庭についても言及しておく必要があるだろう。一つは自然をあざ笑うかのように作られた人工的な庭「至福の園」(2巻12編)で、男たちを墮落させるエロティックな愛の園であるため、志操堅固な妖精の騎士と巡礼に破壊され尽くしてしまう。もう一つは「アドーニスの園」(3巻6編)で、ヴィーナスが支配する愛と生命

『薔薇物語』の挿画 扉を開けて入れてもらっているところと、ナルキッソスの水鏡を覗いて薔薇を発見するところなどが描かれている。テキストには正方形とあるが、どう見ても円形の庭だ。



の園であり、真性の地上楽園である。ここでは生命循環の思想が披瀝され、異教的な香りをまき散らしている。全体に教条的な『妖精女王』の中では幻想性が高く、魅力的な部分である。この人工と自然の、二つの庭の背景については、中山理『イギリス庭園の文化史』(2003/大修館書店)に詳しいので、こちらをご参照いただきたい。

【楽園の展開】

宗教的なエデンの園は、キリスト教の寓話的な夢文学の系譜の中で繰り返し語られ、文芸的にはミルトン『失楽園』(1667)で頂点をなす。しかしこの系譜における庭の造形は、基本的に固定的な楽園のイメージを出ない。例えば『パウロの黙示録』(4世紀頃)で、パウロはエノクに逢い(エノクは生きながら天国に引き上げられたという聖書解釈の伝統があるため)、果実をたわねに実らせた樹木を見る。「木々は、根元から梢に至るまで、実を一杯つけていた。ぶどうの木は一万本の枝を持つており、一つ一つの枝には一万個の房が、一つ一つの房には一万個の粒がついていた。」という調子である。そして、蜜、葡萄酒、乳やオリブ油の四つの川が流れているのも見る。飢えることのない理想の楽園だ。このように、表現的にはおもしろいところもあり、細部ではさまざまに変化を見せていくのだが、楽園の顔そのものは変わることがないのだ。豊かな食物、穏やかな気候、目に心地よい風景。すなわち肉体が決して脅かされることがな

い場所である。

ミルトンは楽園を次のように描く。

かの碧玉色の

泉から湧き出たいくつかの小川は、さざ波の音も楽しげに

煌めく真珠と黄金の砂の上を遊び、こんもりと垂れさがった

樹陰をぬつてうねうねと神酒さながらに流れ、やがて一本一本の

樹を訪れ、まさに楽園にふさわしい繚乱たる百花を育てていた。

それも、精妙な園芸によって、凝った花壇などで育成された

ようなものではなく、豊かな自然が丘や谷や野原に、――

朝の太陽がその曙光を暖かくそそぎ初める広々としたと

野原であれ、陽も透らぬ木蔭が真昼の四阿を小暗くしている

所であれ、とにかくあらゆる所に、溢れるばかりに

咲かせている花であった。まさにこのような、多彩な景観の

美にみちた、幸多き田園であったのだ、この場所は！

脈々たる生氣に富んだ幹から、芳醇な樹液や香油を滴らせている

樹木の森がここにあるかと思えば、黄金色に輝く外皮をつけた

いかにも美味そうな果物を見事につけ、あのヘスペリデスの

物語も、もし真実だとすればこの園においてこそ真実だと

思わせるような森が、かしこにはあった。これらの森の間には、

平地や、平らな丘原や、羊が柔らかな若草を食んでいる所や、

棕櫚の生えた小さな丘などが、点々と存在していた。或る所では、

しとど濡れた谷がその艶やかな膝をひろげ、千紫万紅、秘蔵の

色とりどりの花や棘のない薔薇を誇示していた。かなたには、

湖へと、流れ込んでいた。小鳥たちも、美しい合唱曲を

歌っていた。微風も、そうだ、春の微風も、野や森の薫りを

まきちらしながら、樹々の葉をふるわせ、甘い調べを奏でていた。

(平井正穂訳)

ここには、人工と自然の間を揺れ動いた現実のイギリス庭園の歴史が刻印されているという。しかしやはりエデンの園のイメージをまったく変えてしまうようなものではない。新しい天使像や蛇像を描き出したペネローピ・ファーマーのフェミニズム小説『イヴの物語』（1988）では、楽園のイメージは新しい。なにしろイヴはエデンを息苦しい場所と感じるのだから。また、主観による描写であるため、雨の匂い、土の感触、濃密な草の繁茂など、すべてが観念的ではない、肉感的な表現となっている。

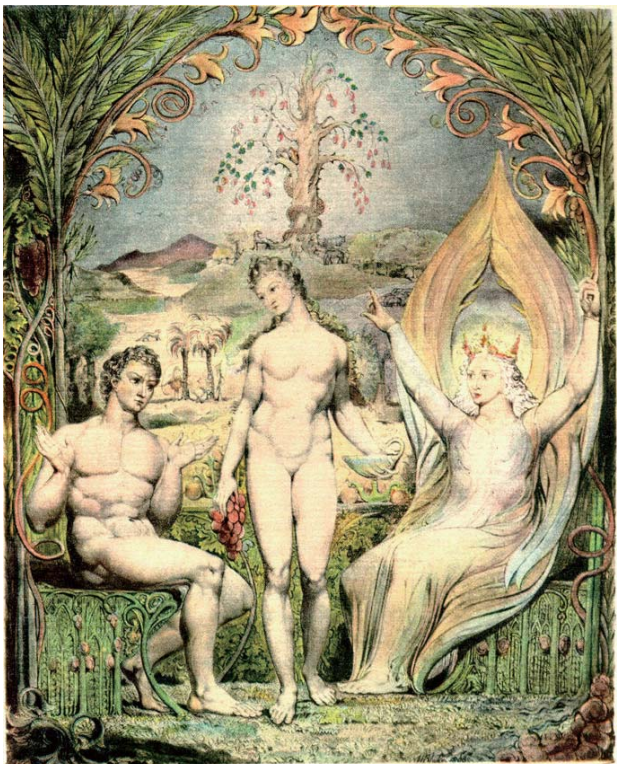
【楽園の意味が変わる】

では、エデンの園からやや離れて、天国のようなどころではどうだろうか。ウエルズ「扉についた扉」（1911）は、何もない壁に、別世界の庭へと通ずる扉を見つけた男を描いた短編である。幼少の時に初めてその扉と遭遇し、扉の中に入った少

* 前掲中山理『イギリス庭園の文化史』による。このほかミルトンの『失楽園』とイギリス庭園についての考察は川崎寿彦『庭のイングラント』（1983／名古屋大学出版会）を参照のこと。

ウィリアム・ブレイク画『失楽園』の挿画。

大天使ミカエルはエデンの園で、アダムとイヴに人類の歴史を語る。



冷涼の気を漂わせている深く暗い岩窟や洞穴があり、その上に蔽いかぶさるように、葡萄の木が紫の房を垂れ、茂った蔓を優しく匍匐させていた。また一方では、せせらぎの音をたてて流れている小川が、丘の斜面を滝つ瀬となって落ち、幾つかの流れに分かれ、分かれたかと思うと再び合して、岸边に咲く天人花の姿を鏡のように澄みきつた面に映している

年は、そこに素晴らしい庭を見出し、至福の時間を過ごす。しかし、哀しいことにその庭を出ることを余儀なくされる。人生の節目節目にその扉は彼の前に現れるが、人生を優先させてしまい、扉の中に入っていくことができない……。この庭の描写では、なによりも精神の遊びが強調されている。庭の美しさや気持ちよさが描かれていくが、それが少年の心にとって重要な要素として描かれていくのである。そこには優しく親切な人々がいて、遊び友達までができるが、彼らはすべて少年の心に喜びをもたらす。おそらく、「天国」とも言うべきところを描くのであれば、もはや肉体は問題とならず、精神だけが問題となるからだろう。とはいえ、こうした彼岸的な場所は場所、ある種の紋切り型の表現を取ってしまうものではあるのだが。ただ、ウエルズのこの作品では「庭」としてはつきりと書かれているところが、印象的だ。

彼岸を垣間見た者が、そこに囚われてしまうというのは、幻想文学の中ではありふれたパターンだ。ウエルズの作品はその一つと言える。バジューフ「石の花」（1924）も同じように、神の庭を見て、そこに囚われた男の物語だ。天才的な石の細工師が、究極の作品を作りたいと熱望する。そのために、鉱山を支配する山の女王に頼み込んでその庭を見せてもらおうのだが、案の定、庭のとりこになってしまう。咲く花も草も、すべてが鉱物でできた美しい庭は、「シヤマシユの庭」を思い出させる。植物の鉱物化という幻想自体は普遍的なものであるように思わ

れるが、それを山の女王の幻惑的な庭として描き出したところに、この作品の妙味がある。

一方、神の庭の凌駕を目指すかのように作り上げた人工庭園もある。エドガー・アラン・ポオ「アルンハイムの地所」(1846)は、ピクチャレスクが大流行したのちの作品だけあって、自然を素材にしながらも擬自然であることと、崇高美がポイントとなっている。作品は庭の描写とロマン派的な庭園論に終始し、類例を見ない「庭小説」となっている。その一方、ポオには珍しく、肯定的な調子になっていることもあって、プロパガンダのようでもある。そのためか、影響力も強く、この作品の影響下に谷崎潤一郎は、活人画や四季の宮殿を配した広大な庭を作り上げる男の物語「金色の死」(1914)を書いた。楽園はもはや身体の安逸を保証するだけの「安楽の園」ではなくなった。「芸術としての庭」が強調され、それは人をドキドキさせるようなアミューズメント装置の役割も果たすようになったのである。擬自然的な「アルンハイムの庭」から、ディズニールランドまでの距離は近い。「金色の死」に影響された江戸川乱歩が書いたのが「パノラマ島奇談」(1927)なのだから。とはいうものの、これは残念ながら文学の功績ではない。現実の庭が、そのように変貌した結果が文学に反映されたにすぎないのである。

「これまで見た中でいちばんすてきな庭」を見出し、絶対にあそこへ行く!と決めて冒険を始める。出会いと別れを繰り返し(アドベンチャーを繰り返す)、ついにその庭にたどりつく。しかしそこは確かに美しいが、白薔薇がペンキで赤く塗られるというようなまがいのものが混じり込んだ場所であり、すぐに首をはねたがる横暴な女王に支配されたところでもない場所だった。言葉を用いてさまざまなものの意味が逆転されていく「不思議の国」だが、庭においては、物質的、直接的に、「すてきな庭」がへんてこりんな庭に改変されているのが興味深い。



アーサー・ラッカム画『不思議の国のアリス』の挿画。

【逆転する庭】

安楽の園としての庭の意味を変えてしまったのは、ポー作品とほぼ同時期に書かれたナサニエル・ホーソーンの「ラパチーニの娘」(1844)ではないかと思う。植物学者のラパチーニは植物園で毒草を栽培しているが、それだけであるならば、中世からの伝統である修道院の癒やしの庭とあまり変わるところがない。毒と薬は紙一重で、毒草は薬草に通ずるからである。しかし、ここでは特別な毒の花(名前がない)を育て、その毒気によって人も殺してしまふ。美しい花園が、そのまま死をもたらす恐怖の園となっている。見た目は楽園のような植物園が、実は正反対の、「身体を脅かす」庭なのだ。これは庭の伝統において、恐るべき変更、革新と言ってもいいだろう。「ラパチーニの娘」は、その毒の花で育てられた娘をめぐる悲恋物語なので、この恐るべき庭はまた愛の庭なのだが、それは「死にいたる愛」の庭とも言える。「ラパチーニの娘」のパスティーシュであるフォードル・ソログープの「毒の園」(1908)は、それをより鮮明にした物語になっている。

庭が、一種のユートピアでもあったのは、「エデンの園」や、「アルキノオス王の庭」「コリュクスの老人の庭」、さらには「六条院の庭」を見ても明らかだろう。しかしユートピアは常にアンチ・ユートピアに逆転される可能性を秘めている。ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』(1865)はそのような逆転を果たした例である。穴の中に落ち込んだアリスは、扉の向こうに

【庭と禁忌】

庭が守られた場所であり、外部からの侵入が禁じられた場所であることは、これまで見てきた通りである。しかしその侵入の禁忌を犯すパターンがあることも見てきた。近代以後の児童文学やファンタジーには、「禁忌を犯す」というモチーフがきわめて多く見られるのであるが、その中で庭に関わるものを検討していこう。

ポーモン夫人「美女と野獣」(1756)は、冬のさなかに薔薇が花を咲かせている庭に迷い込んだ男が、庭の主の饗応を受けたにもかかわらず、娘のためにその薔薇を持って帰ろうと一本手折ったために、罰を受ける。オスカー・ワイルド「わがままな大男」(1888)は、持ち主が留守にしていたすてきな庭に子どもたちが侵入し、そこを遊び場にしてしまうところから話が始まる。やがて持ち主の大男が帰ってきて、子どもたちがうるさく騒ぐので、怒って庭から閉め出してしまふ。禁忌を犯して罰を受けるのははまず、子どもたちである。庭の物語では、侵入しただけで罪に問われることはない。しかし、そこで庭の作物を取る、庭を荒らすなどの行為をすると罰されるのである。アンリ・ボスコ『ズボンをはいたろば』(1937)では、一度は地上楽園に迎えられた少年が、楽園の主の許可を得ないまま花枝を手折ったために、そこから追放される。マリー・ルイーゼ・カシュニッツ『精霊たちの庭』(1975)では、時の流れから守られている庭に入り込んだ兄妹が、乱暴狼藉を働いたために

自然の精霊たちに罰せられる……といった具合である。

現実でも、領主の森や猟場に入り込んだだけでは、厳罰を受けることはない。しかし、そこでものを採取すれば、きつく罰せられる。それは財産の強奪に当たるからだ。「美女と野獣」では、それと同じ観念が背後にある。丹精している薔薇を盗んだのだから、代わりにお前の薔薇である愛しい娘を差し出せ、というわけだ。『精霊たちの庭』でもそうだ。庭に生きるものたちが兄妹の死を求めるのも、奪われた植物や小動物の命の対価としてであり、庭の主からすると、それは妥当なことなのだ。

一方『ズボンをはいたるば』は、エデンの園からの追放を背後にしにさせている。主人公の少年は、魔術師（と目される男）が力をふるって動物たちをてなずけ、植物を育てて築き上げた地上の楽園に、その一員として招かれる。にもかかわらず、好意を抱いた一人の少女のために枝を折り取るという愚考を犯し、そこから追放されてしまうのだから。財産の強奪という観点よりも、楽園の一員として相応しくないと見なされるのである。エデンからの追放が性の認識と不可分であったことを思い出し、ていだきたい。この背景と思春期の微妙な感情とが絡まり合い、『ズボンをはいたるば』は精妙な哀しみを奏でるのだ。

風変わりなのは「わがままな大男」である。大男は自分の権利を行使しただけなのに、セルフフィッシュだと決めつけられ、庭の遊びを奪われてしまう。静かな瞑想の場としての庭は破壊され、代わりに子どもたちの笑い声が響く、別の意味での楽園

てられる。特にコリンはここで別人のように新しく生まれ変わるのであり、庭はまさしく子宮となっている。この庭を再生する手助けをするのが、まず庭の鍵をメアリに与えるコマドリ——キリストと関わる伝承を与えられている小鳥である。次がメアリを適切に指導する庭師——庭師はキリストを象徴するものだ。そしてさらに言葉が理解できるかのような少年、すなわち聖フランチェスコを想起させる少年である。このように、キリスト教的な隠喩がちりばめられ、しかも演じられるのは再生（復活）



インガ「ムーア画『秘密の花園』の挿画。

になるという展開だが、よく考えてみると、理不尽な話である。庭園は、近代になると「公園」という概念につながっていくが、個人の庭は個人の庭であって公園ではない。あたかも罪を犯して領地を没収され、そこが解放されたということの（いわば公園の誕生の）、ていのよい言い訳のようである。あるいは社会主義の進展の影響でもあるのだろうか。宗教的な結末を迎えるこの物語は、読み飛ばせば感動的とも言えるのだが、仔細に読むと、説得力に欠けている。

一方、「閉ざされた庭」への侵入が禁忌に触れず、逆に癒やしにつながるという新展開を示したのが、フランシス・ホジスン・バーネット『秘密の花園』（1909）である。これは庭の象徴性がとても巧みに用いられた作品だ。問題の庭は、庭の中でさらに別の堀で囲って作られた、庭の中の庭、いわば二重に囲われた庭である。そしてその庭は基本的に薔薇の庭である。「閉ざされた庭」は聖母の象徴だと述べたが、「薔薇垣の聖母マリア」の図像に明らかのように、薔薇の庭はより強く聖母を暗示する。その薔薇の庭を愛し、一人息子を産んだ後、庭で亡くなった妻は、うら若い乙女であり、聖処女をイメージさせる。その一方で、この物語にはスーザンという、多くの子どもを産んで彼らを賢く育てている、智慧に満ちた母親が登場する。彼女は別の意味での聖なる母だ。そして庭を手入れて復活させ、すべての和解の糸口を作るのは少女メアリ（マリア）である。この庭の中で、孤児メアリも、孤児同然だった少年コリンも癒やされ、守り育

の劇。古典的な庭の象徴と、ヨーロッパの人々に最も知られているイエス・キリストの物語のイメージを織り込みながら、現代的な新しいキャラクターを創造し、庭をめぐる物語に新しいパターンを導入したのは巧みというほかない。バーネットの中でも最もポピュラーであるのもうなずける傑作である。

梨木香歩『裏庭』（1996）は、ミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』のバスター・シュといった趣の作品だが、物語の前提となっているのが、主人公の少女には、放棄された庭に入り込んだために死んでしまった弟がいたということである。しかしこの物語では、伝統的な侵入の禁忌が描かれているわけではない。むしろ因果がめぐってさまざまな事件が起きているといういかにも日本的な謎解きがなされる。わざわざ西洋館の庭を持ってきたにも関わらず、庭の意味までは深く考えられていない。だから、別世界は「裏庭」と名づけられているけれども、裏側の世界（深層心理的な世界）という程度の意味しか持っていない。日本的な世界観で描くなら、裏庭は裏山であり、親しい顔と厳しい顔と二つながらに持った自然の世界へとつながっていくという可能性もあっただろうが。

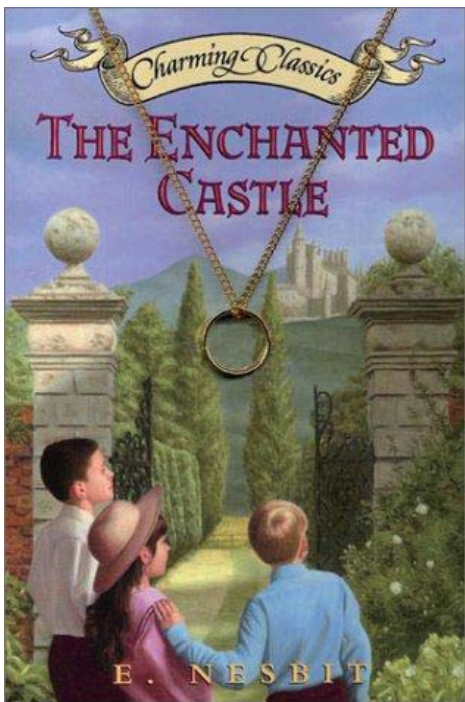
【拡張された庭】

「庭」というよりも「楽園」の延長で考えた場合、例えばエリュシオンの野やアヴァロンの島のような海上世界が、視野に入ってくる。「島」もまた囲われたものであり、いわゆる島巡り譚に

登場する島の中には酒の流れる川あり、奇妙な植物に覆われた島ありと、庭との共通項も多いが、それを「庭」とも言いがたいので、ここでは取り上げない。ただし、島巡り譚の系譜を引きながら、明らかな庭を描いている、サン・テグジュペリ『星の王子さま』（1946）は取り上げておきたい。王子の小さな星は、すべてがきちんと手入れされ、管理されている庭である。火山の手入れをし、植物の世話をする王子は、庭師なのである。「この世は神の箱庭」という言葉がある。神の視点から見れば世界はそんなかわいらしいものだということだろう。SFでは人間が神に成り代わって箱庭の世界を作るヴァーチャルものが、ファンタジーでは神が箱庭のように作り上げた世界に自ら降りていつて冒険を繰り広げる話などが多数作られているが、実際の庭でそれを表現する例はほとんどない。しかし「星の王子さま」は、星を極小のものにしたため、星がそのまま庭になった、つまりは世界が庭であることをそのまま描いた稀有な例となったのだ。一つの星が一つの庭だという発想は、サン・テグジュペリが飛行士として、常に空から地上を見つめ続けたことと無縁ではない。とはいっても、今や我々は地球を外から眺めることもできるようになったが、それを一つの庭と観ずるには、相当程度の想像力が要る。サン・テグジュペリはそのような想像力を持ち得た人だったのであり、彼の想像力が作品となつて世に出た後は、世界の意味は拡張され、一つの星もまた庭として観ずることが可能になったのだ。

された古代の偶像は、男がその指に婚約指輪をはめたため、生命を得て男を取り殺す。この作品は中世の物語に源泉があり、物語類型からすると、軽率な契約もの、また単純に像が動き出す話であるかもしれないが、ここでは、物語が終始庭で展開することに注目しておきたい。

より庭と密接な形で彫像が動き出すファンタジーが展開される作品としては、イーディス・ネズビット『魔法の城』（1907）がある。三人兄妹が細い通路をたどって入り込んだ庭は、魔法のかけられた城の庭だった。まず最初に庭に入り込んだとき、少年少女らは魔法の息吹を感じる。そして「眠れる美女」にくわすが、それはただの「ごっこ遊び」で、魔法とは関係がなかった。ところが願いを叶える指輪が登場して、本物の魔法に彼ら



ところで、「このあたりは俺の庭だ」という慣用句がある。この場合の庭は、「良く知っている場所」という意味となるが、ただ知っているだけでなく、その場所に愛情を持っているというニュアンスが含まれる。イタロ・カルヴィーノ『木のぼり男爵』（1957）は、樹上を「俺の庭」にしてしまった奇矯な人物コジモを描いた長編小説である。少年時代に家族との食事を拒否して樹上に登ったコジモは、それきり二度と地上に降りることなく生涯を終える。木の上を伝って庭の隅々まで行くことができたコジモは、やがて木伝いに隣家に入り込み、少女に出会う。少女に触発されたコジモは、行動範囲をどんどんと広げていき、ついには街道筋の並木にも出没するようになる。木から降りないまま、行動範囲を広げていく主人公など、空前絶後である。庭という観点からすれば、木伝いに行けるところは、どこも彼の領分であり、庭の延長なのだと言える。このような形で庭の範囲を広げてしまった作品はほかにない。

【神秘が顕現する庭】

庭は人工的なものではあるが、自然の写しであり、自然そのものを象徴する。従って、自然界にある精霊もまた、庭に属する存在である。庭に置かれるさまざまな彫像は、自然界の精霊の表現であるともいう。何か契機さえあれば、庭の中の像たちは生命を得て動き出す。プロスペル・メリメの怪奇談「イールのヴィーナス」（1837）はその典型的な例だ。庭の中で発掘

を巻き込む。いつもの「願い事」の魔法ものかと思っていると、さらに、城自体に魔法がかけられていることが判明し、魔法が漲っていると感じたことが正しかったことがわかるのである。非常に凝った展開で、ネズビットの魔法ファンタジーにおける並々ならぬ才能を感じさせる。そしてこの魔法がかけられた庭で、月の光を浴びて彫像たちは生命を得る。庭はこのとき、まったく超自然の世界と化するのである。

フィリパ・ピアス『トムは真夜中の庭で』（1958）は、かつての大邸宅を分割してアパートとして貸している家に、一時的に暮らすことになった少年が、大時計の魔法によって過去の時間に入り込む物語で、物語類型からすると、時間物ということになるだろうが、物語の多くの部分は庭で展開し、庭は重要なトピックスとなっている。主人公の少年にとって、夜中にだけ現れる庭は得がたい遊び場で、彼はそこで一人の少女（過去の人物）と遊ぶことを毎日楽しみにしている。少年は半ば幽霊のような存在で、いろいろなものを動かすことができないが、彼にとって庭は普通の庭だ。一方、少女のほかに、唯一少年を見ることができ庭師にとっては、主人公は悪魔だった。庭師が管理すべき庭は、少年が現れると、悪魔の侵入を受けた恐ろしい場所になってしまう。一方、少女にとって、庭は孤独な長い時間を過ごす場所である。孤児で、伯母に疎まれながら辛い日々を送っている少女にとって、少年と遊ぶ時間はすばらしいひとときで、その時、庭はファンタスティックな遊び場となるのだが、少年

が現れるのはほんの時たまたまだったからだ。作品は終始少年の視点で描かれ、少女の視点はわずかにしか入ってこないため、少女の孤独はあまり前面には出てこない。しかし少女の立場となつて考えるとき、この庭は牢獄に近い。少女が川を渡ることができないシーンは特に印象的だ、川は彼岸と此岸を距てる重要な境界であり、幽霊・魔物は川を渡ることができないし、人は川を渡らなければ彼岸に到達できないということが思い出されるからである。このように、ピアスの描く庭は、一般的な庭の象徴を逆転させる仕掛けを持ち、多面的である。

長い時間をこの「閉ざされた庭」で過ごした少女は、大人になったときについてその庭から解放され、川をどこまでも下つてゆくのである。川下りのシーンが、心揺さぶるものであるのは、こうした前提があるからだ。

最後に、ジャネット・テラー・ライル『エルフたちの午後』（1989）に触れておこう。この作品もまた庭の意味を逆転させる、非常に優れた作品である。舞台となる庭は草ぼうぼうでごみだらけの庭。『トムは真夜中の庭で』の中で「がらくたが置かれた、みるべきもののない場所」とされる裏庭よりもお醜い庭だ。九歳のヒラリーの母親は、危ないので、娘にそこで遊んでほしくない。しかし、その庭の支配者である十一歳のサラケートに招かれたヒラリーは、そこに存在する「エルフの村」を見せられて、夢中になってしまふ。ヒラリーの家には理想的な美しい庭があるのだが、もはやそんなものに価値はない。な

元来は美しい庭で、むしろこれまで語ってきた庭のイメージを崩すことはない。おもしろい作品ではあるが、「庭」という観点から見ても、ニューベリー賞受賞作には及ばないようである。

ぜならそこにはエルフがないのだから。いや、エルフがいると想像をかき立てるようなものがないのだから
がらくただらけの裏庭が、想像力一つで魔法の庭に変わる一方、「美しい理想の庭」は「平凡な庭」となる。庭の価値はみごとなまでに逆転されている。

「妖精が暮らす庭」自体は、むしろ古典的なファンタジーだ。例えばウォルター・クレインは『古いイギリス庭園の花の妖精たち』（1899・左ページ下図参照）で、庭を花の妖精たちが闊歩する別世界に変えた。しかしその庭はあくまでも美しい「イギリスの庭」だった。たとえ、それほど整っていないとしても、せめて美しい野花の咲く庭だった。だがしかし著者はそれを否定し、どんな庭にも神秘は舞い降りることを示す。それを受け入れる精神がありさえすれば。少女たちの心の襞を描きつつこの傑作は、庭を巡る物語としてもユニークな作品だったのである。

後にライルは『花になった子どもたち』（1999）で、より一層はつきりと庭をモチーフとした作品を作り上げた。母を亡くした姉妹が大叔母さんの家で暮らすことになるが、庭で不思議なことが起き、子どもたちが居場所を獲得するという物語である。小説内小説、明かされることなく、想像の余地を残す大叔母さんの過去、あるともないとも知れぬ魔法と神秘など、短めの児童文学ながらも凝った設定となっている。そしてこの庭も荒れた庭だ。だが実は、手入れが行き届かなかっただけの、

